

英国における処方安全性は、指標や施設によりばらつきあり

英国では、プライマリケア向けに、処方安全指標が開発されているが、これまで大規模なプライマリケアデータベースでの評価は行われていなかった。本研究では、英国の一般診療所における複数のタイプの潜在的有害処方の割合について調べ、また診療所間にばらつきがあるかどうかについて検討した。

2013年4月までに Clinical Practice Research Datalink に登録された 526 施設において、診断と処方の組み合わせで特定した潜在的処方リスクやモニタリングエラーの可能性がある成人患者を対象とした。調査の結果、949,552 例のうち 49,927 例（5.26%）が少なくとも 1 つの処方安全指標に抵触し、また、182,721 例のうち 21,501 例（11.8%）が少なくとも 1 つのモニタリング指標に抵触した。有害処方率は、潜在的処方リスクタイプの違いによりばらつきがあり、ほぼゼロのものから 10.21%にわたっていた。また、不十分なモニタリングは、10.4%から 41.9%にわたっていた。高齢者や多剤反復処方患者で処方安全指標の抵触リスクが低かった。一方、若年で反復処方が少ない患者では、モニタリング指標の抵触リスクが有意に高かった。さらに、いくつかの指標については診療所間に高いばらつきがみられた。

したがって、英国の一般診療所における処方安全性については、患者の約 5%に不適切処方がみられ、また約 12%でモニタリングの記録が欠如していることが明らかとなった。不適切処方のリスクは、高齢者や多剤反復処方されている患者でとくに高かった。

出典：British Medical Journal. 2015; 351: h5501